

東区 E 産探求プロジェクトまちあるき「通船川コース」レポート

学生記者 新潟デザイン専門学校グラフィックデザイン科1 犬塚暁都

今回、私は東区 E 産探求プロジェクトまちあるき「通船川コース」に参加し、通船川の歴史とその変遷を学びました。

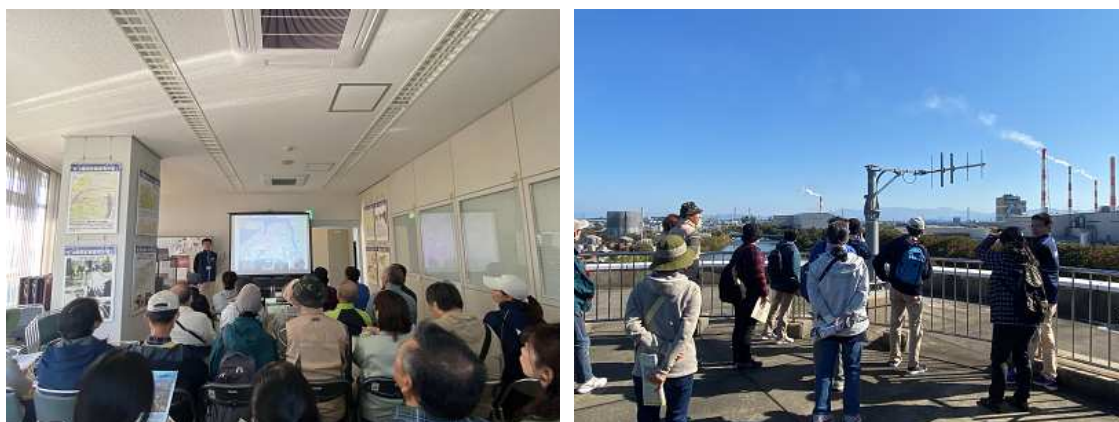
東区役所からバスで出発した私たちは、最初に日本海に面する臨港埠頭へと向かいました。株式会社リンコーコーポレーションが運営するこの港は、新潟の港湾運送の中心として、製紙用の原料や鉄スクラップの保管、船舶からの荷おろし、積み込みなどを担っています。特に対岸に積まれた鉄スクラップの山は圧巻でした。多くは建物の解体時や金属加工の過程で発生した廃材でリサイクルされ、鉄製品に生まれ変わります。この港は、かつて牧場として運営されていましたが、当時の経営者が、港湾の重要性に注目し、港へと転換した歴史を持ちます。今も新潟の物流を支える重要な拠点でもあり、日本で唯一の私有港湾として民間の手で運営をされています。



日本海から流れる通船川は、かつて臨港埠頭に運ばれた木材の搬送において、重要な役割を果たしていました。港に到着した木材を一度水面に浮かばせ、イカダに組み上げ、通船川を渡って木材加工業者まで運ぶという方法が用いられており、2021 年まで実際に使用されていました。この伝統的な輸送手段は、新潟市特有の産業文化であり、川と海を活かした地域の特徴がうかがえます。

次に訪れたのは山の下閘門排水機場です。この施設は東新潟のゼロメートル地帯を水害から守っています。閘門とは、水位差のある河川に船を通すための施設で、門扉の多くは上下に開閉するのに対し、ここでは日本でも珍しい観音開きの構造です。排水機場は 4 台運転すると 25 メートルプールを約 8 秒で空にできる能力を持つポンプを備えており、大雨の際に河川の水位を調整します。全ポンプが作動するのは年に 1、2 回程度ですが、今年はずで

に4回の作動があり、この施設が新潟を水害から守る姿を目の当たりにできました。



見学後、私たちは通船川沿いを大山ポンプ場へ約30分かけて歩きました。当日は天候が心配されましたが、晴天で気温も高く、まちあるきに適した日和でした。通船川沿いを歩くと、工場の煙突から煙がもくもくと立ち上る様子が見え、工場の機械音も響き、穏やかな河川敷とは異なる別世界のような印象を受けました。到着した頃にはすこし汗ばむほどで、良い運動になりました。



最後に、大山ポンプ場からバスに乗り、新潟合板振興株式会社の工場と隣接する旧県営第1貯木場の見学へ向かいました。この会社は、原木から合板（ベニヤ板）を製造する過程を担い、製品は建築をはじめ多様な用途に使われています。屋外に積み上げられた原木は整然としていて、合板になるとは信じられないほど美しかったです。これらの原木は、桂むきにして薄く製造し、乾燥、貼り合わせなどの過程を経て、私たちが目にする合板へと変化を遂げます。なお、原木は2021年まで通船川を通じて運ばれていたため、この川がかつて産業の拠点であったことが伺えました。



今回の東区 E 産探求プロジェクト「通船川コース」を通じ、新潟の水運業や通船川の歴史と産業について多くの知見を得ました。普段は見ることのできない現場に足を運び、私たちの生活を支える重要な仕事を目にする事で、社会が様々な役割を通じて支え合っていることを改めて実感しました。